

国語科

読解における「活用型」授業の展開に関する研究

—古典作品を比較することを通して「学ぶ意義」に迫らせる—

西木 英里

1 はじめに

本研究は、「知識・技能を活用する思考力・判断力・表現力」を養い培う授業とはどのような授業なのか具体的な方法論を明らかにするために、昨年度は、太宰治作「走れメロス」を教材に用いた読解の授業展開を分析していった。今年度は古典作品を用いた読解の授業展開を分析することを目的とする。

「知識・技能を実生活に活用する力」を測定するPISA調査から、教科で学ぶ内容が日常生活や現実社会の中でどのように生かされているのか、自分の将来にどのように影響してくるのかという「学ぶ意義」を考えさせる取り組みの必要性が強く感じられる。読解の授業を通して、必要な情報を得る力や適切な資料を取捨選択する力、知識や体験と関連付けて考えたり深めたりする力を培うような、実生活の場に活かされる内容が多く取り上げられるようになってきていることから窺える。このことから、「読解を通して、知識・技能を活用する思考力・判断力・表現力を養う活用型の授業の具体的な展開」の研究は重要であると考えられる。そこで昨年度は、PISA調査の、情報の取出しとテキストの解釈、熟考・評価、自己の意見を表現する活動を積極的に取り入れ、テキストのテーマと自己の感性や価値観とを照合し、その優先順位を意志決定させる学びを「現代文」で行った。そして今年度は、「古典」を読むことで前述の学びを取り入れた「活用型」の授業を展開することを通して、子どもたちが見出しにくい古典学習の意義について考えさせていく。

学習指導要領によると、古文特有のリズムを味

わい古典の世界に触れることや、歴史的背景に注意して読みその世界に親しむことが、伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項で育成すべき力だといわれている。古典作品を比較読みする中で、原文であろうと現代語訳文であろうと、それらを通して伝統的な文章を読解し、新しい文化を創造しながら古典に親しむ態度を養うところに古典授業の意義があると思われる。現代文の作品との大きな違いは、「文語の決まり」や「語句や修辞の意味と用法」など読解するための基礎的知識が必要となることであり、中学生にとって古典作品を読み親しむことに原文と現代語訳文に大きな差はないと考え、適宜現代語訳文やイラスト、漫画を使用した。

ここで、増淵恒吉氏の考える古文教育の意義について触れておく。

増淵恒吉氏は、国語科に対して次のように述べている。

「国語科は、国語の理解力・表現力を児童・生徒の身につけさせ、国語の力を育成することを任務としている教科である。しかし、それは、単なる実用主義的意味のみを持つ教科ではない。(中略)言語活動の本質は、言語の技能や技術のみにあるのではなく、常に、精神活動ひいては人間性と一体であるということが出来る。国語の理解活動によって、情報や知識を獲得して思想を形成し、感情・情操を豊かにし、判断力や批判力を高めていく。また、同時に、思想や感情を他に伝達し共有し合って、人間関係を維持し向上させていく。理解力・表現力の育成と人間性の陶冶とは、国語科にあっては、いわば同心円の関係にあるといつてよい。」¹⁾

つまり、国語科における最大のねらいは「理解力・表現力の育成」と「人間性の陶冶」ということになる。この二つのねらいを、国語科の中で最も重要だとみなし、特に参与するものは「文学」及び「古典」であるとしている。なぜなら増淵氏は文学や古典を「ことばの感覚を鋭くし、人間形成を図ることにより傾斜した」ものであり、「人生における普遍的な真実とは何か、不易な善美なるものは何かを追い求めて、それをことばに具象・形象化した」ものと考えているからである。

増淵氏の考える「古文教育の意義」については、著書で述べられており、少なくとも「言語感覚の練磨」の面から生じたものと「人間性の育成」の面から生じたものの二つが存在しているようである²⁾。

意義の一つ目の「言語感覚の練磨」とは、「ことばの働きに敏感に反応して、国語の持つ美しさ、繊細さ、微妙さを感じ得せしめること」を挙げている³⁾。「言語感覚の練磨」を図るために古文の読解力をつける必要があると捉えられる。

古文教育のもう一つの柱として「我々の祖先が、どんな生き方、どんな考え方をし、どんな状況にあってどんな行動をしたか、そうした生きざまを読み取って、我々の生活や考え方に照らし合わせ、心の糧として生活を豊かにしていくこと」にあるとしている。古文を学習することによって、先人の生きた姿や感情の起伏、思念などを知る。そこには、現在の生活を向上させる要素もあれば、否定される要素も存在する。どちらにしろ、日本人の偽ることのない生活や思想が存在しているのである。その中から、現代に生かすべきものとそうでないものを見極め、自分自身で取捨選択をおこなうことによって「人間性の育成」を図ろうとしていくのである³⁾。

以上のことを踏まえ、増淵恒吉氏の考えるような古典を学ぶ意義を子どもが実感したり気づいたりする授業の方法を具体的に考え、その授業展開を分析していくこととする。

具体的には次のことに留意した。

①情報の取出しとテキストの解釈、熟考や評価、

表現などの「活用例」といわれる授業展開を、子どもの実生活に関わるような、あるいは興味関心を強くひくものややらざるをえない目的を提示して行っていく。

②「論理的認識」と「感性的認識」との統合を図るべく、論理だけで読解するのではなく、生徒の感性やひらめきを表現する場面を仕組み、「感性的認識」も高めることができる学習指導開発を行っていく。

③作品の書かれた時代を意識させたり、現代との違いを考えさせたりする。

④筆者の人間像を、作品を通して繰り返し具体的にイメージさせ、自己との比較をさせる。

2 研究の方法

(1) 対象生徒

本学校園の9年(中学3年生)1クラスの子ども40名を対象に調査を行った。小集団の数は10グループであり、各小集団の人数は、4名構成が10グループであった。

(2) 調査時期

本単元は、11月初旬から実施した。

(3) 授業構成

調査対象とした単元は古文「枕草子」「おくのほそ道」「源氏物語」であった。授業計画は次のとおりである。

第1次 「枕草子」を読む(2時間)

第2次 「おくのほそ道」を読む(2時間)

第3次 「源氏物語」を読む(2時間)

第4次 3作品の比較文を書く(1時間)

第5次 古典を学ぶ意義を考える(2時間)

(4) 授業の概要

まず単元導入時には、古典学習についての簡単なアンケートを取った。「古典の学習が得意である」と答えた生徒は25%と少なく、「不得意である」と考えている生徒が圧倒的に多い。しかし、「古典の学習が好きだ」と答えた生徒は65%おり、「昔の人の暮らしや歴史について興味がある」生徒は60%と、不得意だと思いつつも古典や昔に

について知ることには高い興味関心を抱いていることがわかった。これまでの古文学習で、7年生では「竹取物語」、8年生では「平家物語」を主に読んできた。ともに教科書には掲載されていない文章を発展的内容として読んだり、登場人物の心情に寄り添ったりする授業展開を行ってきた結果、古典文学に対する興味関心の高さに繋がっていると考えられる。多くの生徒が興味関心を持って学習できる中で、なぜ古典を学ぶのかという「学ぶ意義」を9年生の段階でしっかり考えさせるための時間を終末に設けた。

では、授業の具体についてだが、第1次の導入では「枕草子」が書かれた簡単な時代背景や作者の清少納言について紫式部を引き合いにイメージを持たせた。これは3次の「源氏物語」へのつながりを意識させるためでもあった。教科書にある「春はあけぼの」と「うつくしきもの」では、「自分だったら…」という清少納言と自分の考えを比較することを意識させながら読ませていった。

第1次では、教科書にある二つの段以外に、以下の13の段を現代語訳文で読んでいき、思うことを書いていった。

- ・第二十四段「おいさきなく」
- ・第二十八段「にくきもの」
- ・第七十五段「ありがたきもの」
- ・第九十六段「かたはらいたきもの」
- ・第一二七段「はしたなきもの」
- ・第一五五段「むつかしげなるもの」
- ・第一五九段「とくゆかしきもの」
- ・第一六〇段「心もとなきもの」
- ・第一九五段「ふと心おとりとかするものは」
- ・第二六一段「ことに人に知られぬもの」
- ・第二六七段「世の中になおいと心うきものは」
- ・第二六九段「よろずのことよりも情けあるこそ」
- ・第二七一段「人の顔に、とり分きて」

第2次の「おくのほそ道」は、スライドを用いながら、芭蕉の歩いた道や読んだ俳句を視覚的にも確認し、また、「松尾芭蕉はなぜこんなに旅に出るのだろうか」についても考えていった。

第3次の「源氏物語」は、第1次で清少納言の

人物像を捉えさせるために引き合いに出した紫式部が作者ということで、自然と作者や作品について比較しながら読むことができた。ただ、「源氏物語」の文章自体は中学生にはやや難しい。「枕草子」「おくのほそ道」と比較読みする中で、原文であろうと現代語訳文であろうと、それらを通して伝統的な文章を読解し、新しい文化を創造しながら古典に親しむ態度を養うところに古典授業の意義があるとするため、「源氏物語」を読むためには特に現代語訳文やイラスト、漫画を使用した。

第1次から第3次では、作品の書かれた時代背景を理解したり、作者の人物像を意識させたりして、現代と昔、自分と作者の比較をさせながら読ませていった。これらをもとに、第4次では「現代との相違」と「自分との相違」を中心に比較文を書かせ、第5次の「学ぶ意義」を考える根拠の1つとさせた。

3 結果と考察

第1次での導入で清少納言について紫式部を引き合いにイメージを持たせることは、平安時代と現代の文化の違いや人間関係について触れることができるため、歴史的背景に注意して読みその世界に親しむことにつながった。「枕草子」では、清少納言の物事の捉え方や着眼点、価値観について本文を根拠に読み、自分との比較を行った。

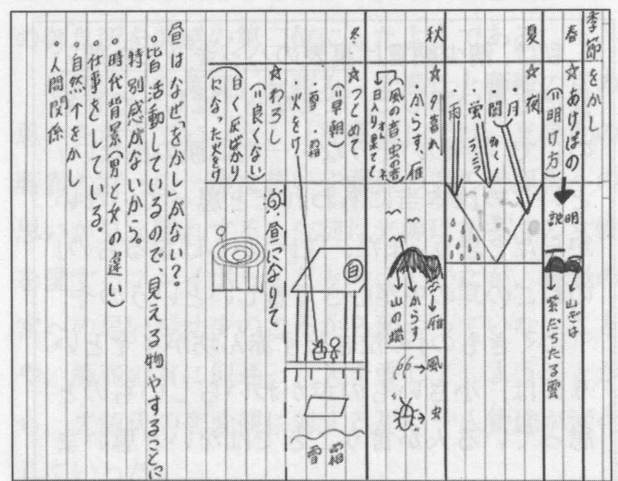


図1 枕草子 生徒のノート

春夏秋冬で「をかし（趣がある）」と捉えているものの共通点は「自然」であり、色彩にも着目していると生徒は感じた。また、昼間を「をかし」と捉える季節がなく、さらにあえて「わろし」として出ていることに対しては、「多くの人が活動しており、自分も中宮様のお世話をするという仕事をしている時間のため」「一人でじっくり何かを観察したり感じたりすることが難しいのではないか」という意見や、「人間関係がストレスになっているのではないか」という考えがあった。

教科書の2段と発展的に読んだ13段の計15段を踏まえて、清少納言と自分の価値観を比較したり、清少納言の人物像を評したりする文章を書いてまとめた。

清少納言は、「うつくしきもの」とは、ちごなどの小さいものと言っている。確かに小さいものはかわいいと思う。けれど私は、小さくても、犬や猫、鳥のように、小さくても、ふわふわしたものが「うつくしきもの」だと思ふ。なぜならば、小さくても、トカゲやヤモリ、魚などで、私はかわいいと思えない。幼子やすずめの子がかわいいと思うのは共感できる。なので私は「うつくしきもの」は小さくてもふわふわしたものだと思ふ。

「うつくしきもの」に寄せて

私は、清少納言は裏表のハッキリした悪い女だと思いました。なぜなら「はしたなきもの」で「かわいそうな…一向に涙の出ない」というのは本当にあわれだと思っていないからだと思う。また、「むつかしげなるもの」のねこの耳の中がむさくるしいというのや、「にくきもの」の泣き出す赤ん坊がイヤというのは、小さいものがかわいらしいものと思っている人が言うことではないと思いません。

しかし、清少納言は宮仕えする時にイヤな経験をしたんだと思いました。「おいさきなく」の宮仕えをしている限り軽く見られる傾向があるというのから読み取れました。

だから、清少納言が悪い女になったのは仕方ないことだと思いました。

私だったら、得意になってべらべらしゃべられても、うわさ話をまきちらす人がいても、無視をするのでイライラしません。そして、年をとっていく母親を忘れたことはありません。そのことから清少納言の思っているイライラすることや、ばつの悪いものなどを読んでみると、性格の悪い裏表のある女だと思いました。

「清少納言の人物像」について①

「おいさきなく」を読んで、清少納言は、男女の身分差に疑問を抱いていたのではないかと推測する。「なぜ実力のある私のような女も軽く見られなければならない時代なのか？」そんな嘆きが聞こえる。

一方で、清少納言は、嫌いなものと好きなものをしっかり区別していたと思う。嫌いなものは、実力のないでしゃばり、悪口やうわさ話の好きな人、汚いものなど。一方、好きなものは、気遣いのできる優しい男やかわいらしいものなどだ。これを見ると、清少納言が好きなのは、心、体がきれいなものだと予想する。私も良いと思う。しっかりとした考えを持っていて、実力のある女、清少納言は、女が軽く見られていた平安時代だと、嫌われても仕方がない存在のような気がする。

「清少納言の人物像」について②

現代的な考えとけっこう似ている。「にくきもの」や「かたはらいたきもの」「はしたなきもの」「心もとなきもの」など、今の私たちにも共感できるようなところがある。

「にくきもの」の、一番初めての「急いでいることがあるときにやって来て、長話をする客」など、わたしたちにとってけっこう身近な話だと思う。ただ、すずりの話など、現代ではあまり使わないものの話はちょっと比較しづらいと思った。

私は、人の顔を見ているのは楽しいと思うけど、絵の中の顔を見る方が楽しいと思う。清少納言は、まわりから美人だとか、すごいなどと言われたかった、認めてほしかったんだと思う。紫式部がライバルということは、その人よりも自分の方が優秀だとまわりに認めてほしくて書いたんだと思う。

上から目線で自分の方が偉いのよ感が出ている気がする。

「清少納言の人物像」について③

第3次の「源氏物語」は、第1次の清少納言と比較した紫式部が作者ということで、自然と作者や作品について比較しながら読むことができた。

「源氏物語」を読むために現代語訳文やイラスト、漫画を使用した図2のようなプリントを作成した。

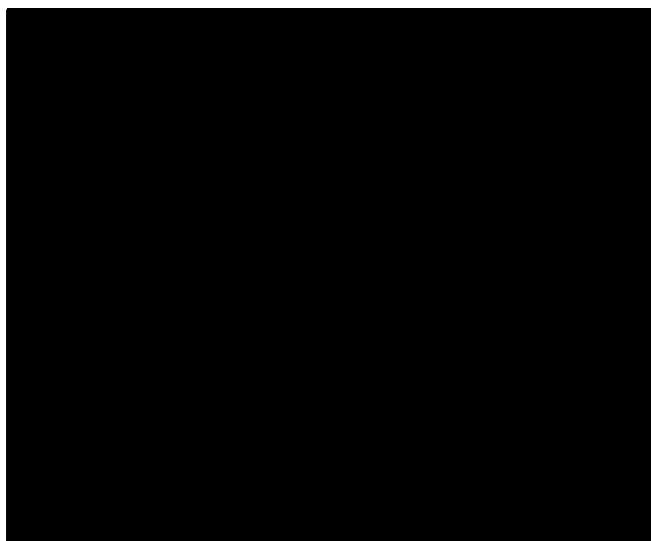


図2 源氏物語 本文プリント①

「源氏物語」では、第一段「父帝と母桐壺更衣の物語」（図2）と「夕顔」, 「若紫」を読んでいった。これらの話には、「桐壺の更衣」「藤壺の宮」「夕顔」「六条の御息所」「紫の上」の5人の女性が登場し、主人公である光源氏や父帝とのかかわりの中で人物像を描くことができる。読後、「桐壺の更衣」「藤壺の宮」「夕顔」「六条の御息所」「紫の上」の5人の女性を比較し、「共感できる人・気持ちが揺さぶられる人」と「不満を感じる人・関わりたくない人」をそれぞれ挙げさせたら次のような結果となった。

表1 5人の女性の比較

	共感	不満
第一位	夕顔の君	六条の御息所
第二位	六条の御息所	藤壺の宮
第三位	紫の上	(光源氏)
第四位	桐壺・藤壺	

共感の第二位が「六条の御息所」になったことが意外であった。理由としては「恋をすれば嫉妬をする気持ちはわかる」が主であり、一見、不満の第一位に挙げられた理由の「呪い」や「死ぬ」「年齢」などだけ見えてしまう人物である。しかしながら、論理だけの読解だけでなく、生徒自身の考えや知識・感性などでとらえた結果、「呪い殺すようなことはいけないけれど、年上としてのプライドが素直にさせないことや、愛する人を独占したい気持ちは何となくわかる」という意見が六条の御息所を共感の第二位にしたようである。

最後に「紅葉賀」を読み、光源氏と藤壺の宮の思いを考えていった。「紅葉賀」では、光源氏の藤壺の宮への一途な想いや藤壺の宮の光源氏への思いが見え隠れする。生徒は光源氏を多くの女性を愛するプレイボーイだと考えていたが、藤壺の宮への思いが幼少のころから変わっていないことや、藤壺の宮に似通った人を愛してしまうことから、光源氏の恋愛観に対する思いや人物像が変化していった。

第4次では、3つの作品を読んで「現代との相違」と「自分との相違」を中心に比較文を書かせた。取り上げる作品は3作品すべてでも1つ取り上げて書いても良いこととした。

自分は源氏物語を読んでみて人間の本性が分かると思います。(中略)現代と昔は約1300年違いますが、この1300年間の中で、人と人との関係や考え方がすごく異なっているということが分かりました。しかし、平安時代から800年経った江戸時代でも平安時代とあまり変わらない文化も残っています。

「源氏物語」の登場人物が人間味あふれていることから、「人間の本性が分かる」としている。現代の自分と比較すると大きな差を感じ、また平安時代よりは現代に近い江戸時代(「おくのほそ道」の時代)に平安時代に似たものを感じている。

「源氏物語」が一番好きだと思いました。なぜなら「源氏物語」は恋愛の物語で現代の私たちでも共感できる部分が多くおもしろいと感じたからです。(中略)源氏は多くの人を傷つけていて最低だという感想を持ちました。でも授業のなかで読んで考えていくうちにそうでないことに気づきました。(中略)このように現代の私たちが読んでいておもしろいと感じる物語が平安時代に書かれていたということはすごいことだと思いました。現代と昔を比較すると人間の気持ちのもちかたはあまり変わっていないということが分かりました。だから「源氏物語」では登場人物の気持ちで共感できるところがたくさんあるし、「おくのほそ道」でも人間の自然への感じ方や気持ちも共感でき、枕草子ではそれぞれの季節の「をかし」なものも私も共感できる部分があり現代の文学とひけをとらないくらい平安時代や江戸時代の文学のレベルは高いなと感じました。

「源氏物語」を中心に述べているが、今も昔も人間の気持ちというものは変わらないものだとしている。また、授業内で考え方が変わったり、3つの作品の面白みや文章の巧みさを感じることができている。

源氏物語が一番読みごたえがあると感じました。話の構成が複雑でありながらもおもしろかったです。(中略)今では考えられない情景やしきたりも多く、現代と平安時代の共通点や相違点を多く見つけることができた作品でした。また、現代の著者よりも清少納言や紫式部の方が自分の考え方や価値観などを前面的に出しているようにも感じました。特に枕草子では物の良し悪しを、清少納言の感覚そのもので書いてあり、現代ではあまり見かけることのないタイプの文章で読者の共感を得るのが難しいのではないかと思います。

「源氏物語」について評しながらも、中心は作者である紫式部と清少納言について述べられている。作者のものの見方や価値観が現代の作品よりも濃く反映されていることと、「枕草子」はそれが顕著なため生徒自身も共感をしにくかったようだ。

映画もドラマもない時代にこんな素晴らしい作品を作り上げた紫式部を私は尊敬している。なぜなら私が今持つ考えはTVや本から得た他人の考えを元にしているものが多いからだ。それに比べて紫式部は今と比べてはるかに考えを得る手段も、また考え自体も少なかったのにもかかわらず、源氏物語を作り上げている。これは真似できないことである。また、源氏物語の登場人物一人一人が人間味にあふれていることも私にとって驚きである。きっと紫式部は生身の人間をよく観察する力に優れていたのだろう。

この生徒は、物語の内容や構成がどのようにしてつくられたのかを、現代の物語や自分と比較して考えている。自分の想像の根拠は他から得た知識や想像物であり、それらを得る手段の少なかった時代にこれだけの恋愛長編物語を書くことができることへの驚きと、そこから見取することができる紫式部像を述べている。

生徒のまとめ作文の記述内容の分類を行った結果、次の6項目に分類され各項目数は以下のとおりであった。

- ・枕草子と源氏物語の比較（8個）
- ・枕草子（4個）
- ・おくのほそ道（9個）
- ・源氏物語（24個）
- ・現代との比較（8個）
- ・その他感想や自分の考え（5個）

やはり「源氏物語」に対する興味関心を最も強く抱いたようである。

第5次では、第1次から第4次の内容を踏まえながら、古典を学ぶ意義について考えた。まずは個人で考え、それをもとに班での討議に入った。「何のために古典を学ぶのか」について班で考えた結果は次の通りである。

表2 古典文学を学習して感じた学ぶ意義

1班	・時代の特色に合った文学作品とその時代に基づいて流れていく歴史にしたしみ、現代と比較し学ぶため。
2班	・ <u>新しいことを始めるにあたって、古い事、昔の時代から学ぶことが大切だから。</u> 【温故知新】
3班	・世の作品の基礎となる。これを読むことによって、作品における真のおもしろさの発見。
4班	・忙しく変わる現代によって、心が振り回され落ち着かない中で古典を読み深めることで、人間と世の中について考え、落ち着いて生活するため。
5班	・歴史では歴史的な事柄しか学べないが、

	古典を学習することで、現代人は <u>当時の人々の感情を見ることができる。</u>
6班	・現代と昔の作品を比較して、歴史を学ぶことができる。
7班	・現代の人々の風流離れを引き戻し、ふれることにより <u>豊かな人間性と心を養う。</u> 現代と過去を比べることによって違いを知る。そして生活にいかす。
8班	・古典は国語の中の歴史です。私たちは <u>歴史を学ぶことで人生の糧としています。</u> だから国語で古典を学ぶのです！また現代の文と古典を比較することによって <u>私たちの生き方を見つめ直すことができるのです！</u> そして古典から学び考えたことを元にして私たちは人生を歩んでいくのでしょうか。生きねば！
9班	・現代の作品と比較をし、それぞれの良い点、悪い点を考え、古典にも興味を持つ。また、それぞれが考えた意見の比較をし、他の視点から見る目を養う。
10班	・昔の文学から <u>当時の生活様式</u> を知れる。

班討議でまとめた意見は、自由に書かせたため、記述の量に差が出た。しかし、次の時間には他の班の意見に詳しく説明を求めたり、質問や疑問、反論などを投げかけたりする全体討議を行った。

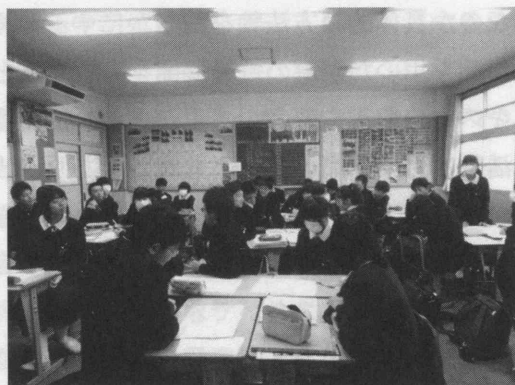


図3 全体討議の様子

全体討議を経て、再び個人で古典を学ぶ意義について作文をしてまとめた。

私は、古典を学ぶことから、古い日本文化と、今も変わらない日本人の感受性に気付くことができると思う。古典は、その当時の生活環境や時代背景を知ることができる。また、どういう話が当時の人に人気があったのか、登場人物の心情など、人の気持ちも知ることができる。これらのことから、古典を学ぶことによって、今も変わらない日本人の姿や感情に気付くことができると思う。

古典を学ぶ意義は、昔の人の行動や感情を知ることができることと昔のことを知り現在に生かすことだと思う。社会の歴史の授業では昔の人の感情を知ることができない。しかし、古典を学べば知ることができる。また、新しいことをするためには昔のことを知る必要があると私は考えている。理由は、過去の失敗を繰り返すことを防ぐことができるからだ。これらのために古典を学んでいると考える。

4 結論と今後の課題

本研究の結果、「知識・技能を活用する思考力・判断力・表現力」を養い培う授業とはどのような授業なのか具体的な方法論を明らかにするために、古典作品を用いた読解の授業展開を分析すると、

- ①テキストの解釈や熟考、表現などの「活用型」の活動は古典作品の読解にも有効であり、当時生きていた人の行いや感情を知ることができるため、興味関心を持って読みながら現代の自分と自然に比較することができる。
- ②古文を解釈する中で、歴史的背景や当時の文化を理解することができ、現代との比較もすることができる。

③同一作品でも複数の文章を読んだり、複数の作品を読んだりして、比較することがより作品のテーマを捉え、自己の感性や価値観と照合することができる。

ということが言える。

増淵恒吉氏の考える古文教育の意義の1つである「我々の祖先が、どんな生き方、どんな考え方をし、どんな状況にあってどんな行動をしたか、そうした生きざまを読み取って、我々の生活や考え方に照らし合わせ、心の糧として生活を豊かにしていくこと」と同様のことを生徒たちも挙げている。個人や班討議だけでは不足な部分を、全体討議を経て全体がこれらの考えに気付いたり、考えを深めたりすることができた。古文を学習する意義の中で、「現在の生活を向上させたり現代にいかしたりすることがあるのか」と「豊かな人間性を養い人生の糧になるとはどういうことか」についてが、全体討議の主な話題となった。その中から、現代にいかすべきものとそうでないものを見極める大切さと、自分自身で取捨選択をしながら色々なことを知ることを通して人間性の育成が図れるという結論に生徒たちは達した³⁾。

一方、古典作品を比較読みさせる中で、歴史的背景や当時の文化についての知識が乏しく、多くの補足説明を必要とした。また本研究では、古文の意義の1つである「言語感覚の練磨」には重きを置かなかったため、原文に親しむ態度までは育成できていない。このことが、古典の学習が得意である生徒が余り増加しない原因だと考え、これらのことは今後の課題である。

<注および引用文献>

- 1) 増淵恒吉:「増淵恒吉国語教育論集 上巻 古典教育論」, 有精堂出版, p. 2, 1981.
- 2) 増淵恒吉:「増淵恒吉国語教育論集 上巻 古典教育論」, 有精堂出版, pp. 29-51, 1981.
- 3) 増淵恒吉:「増淵恒吉国語教育論集 上巻 古典教育論」, 有精堂出版, pp. 5-12, 1981.